

膜屋根のいえ

本作品は、東京の住宅密集地という厳しい都市条件のもと、膜構造の特性を住宅スケールで巧みに昇華させた意欲的な試みである。三方を建物に囲まれた敷地条件に対し、膜屋根を通して柔らかな自然光を取り込み、限られた内部空間に開放感と奥行きを与えている点がまず高く評価できる。

屋根に採用された二重膜の構成は、上膜・下膜の間に構造体と断熱層、空気層を内包し、光環境・熱環境・通風を一体的に制御する合理的なシステムとして成立している。特に、下膜をカテナリー状に支持することで生まれる半円形のライトチューブは、膜素材ならではの柔軟性を生かした表現であり、機能と意匠を高度に統合している。

また、1階と2階で明確に異なる光環境を設定し、上階では外界の変化を膜越しに感覚的に受け止め、下階では静的で落ち着いた空間を構成するという空間操作も秀逸である。明け方から夕方まで刻々と変化する光の表情は、膜屋根を単なる被覆材ではなく、環境を媒介する「皮膚」として位置づける本作の思想を端的に表している。

仮設・恒久建築で培われた膜技術を恒久住宅へと展開し、構造・環境・生活の質を高い次元で成立させた本作品は、膜構造の適用領域を拡張するものであり、今後の住宅建築における膜構造の新たな可能性を示すものとして、膜構造デザイン賞にふさわしいと評価した。

表彰委員 鈴木久文